

四年越しのレスに泣く私を義父が救済。『息子の尻ぬぐいだ』と自慰手伝いで開発され、深夜に自ら部屋をノックし挿入をねだるまで甘く躡けられる話
サンプル（一部抜粋）

「んー…」

ピピピピッと響くアラームの音で目が覚める。

「…朝ごはん作らなきゃ。」

隣で眠る夫の穏やかな寝息を聞いて、音を立てないようにそっと布団を出る…
これが私の一日の始まりだ。

私の名前は愛。二十九歳の専業主婦で四歳年上の夫を愛する普通の妻だ。

「…じゃあ、おやすみ。」

夫は私の頭をそっと撫で、私に背中を向けて眠ろうとしていた。

「…」

私は幸人の背中を見ながら小さく息を吐いた。

「ねえ、幸人…したい…」

幸人は私から明確に視線をそらして、困ったように笑って私の頭を撫でた。

「…今日は疲れてるんだ。ごめんね。」

それに隣の部屋に父さんがいるんだし。ほら、色々と気を遣うじゃん？」

嘘つき。お義父さんと同居する前から、疲れてるって言い訳をしていたくせに…。
断る理由が同居で増えて…あなたはシなくて済むって安心しての…？

「…息子の不始末は親の責任だよな。」

しばらくの沈黙の後、小さなお義父さんのぼやきが耳に入った。

「…え？」

「力、抜いてなさい。」

「ん…っ、お義父…さん、や、なに…してるんですか…っ」

「…いいから。これは息子の尻ぬぐいだ。」

ただ…オナニーの手伝いをしてるだけ。」

「レスはいつから？」

お義父さんは表情を一切変えず、私の手首をぎゅっと掴んでそう言ってきた。

「え…」

「いつから？」

「なんで……」

「昨日のあの感じだと、多分随分ご無沙汰じゃないかなと思ってね。もしそうなら……昨日のオナニーだけじゃ満足出来ないでしょ？」

表情が一切変わらないお義父さんが……怖かった。

「……そんな事聞いて……どうするんですか……」

捕まれた腕は……びくとも動かなかった。

「愛ちゃん。質問に質問で返すのは愚行だね。

俺はただ息子の尻ぬぐいがしたいだけだよ。」

「それに……愛ちゃん、昨日泣いていただろ？」

あんなの見て、放っておけると思う？

いつも明るくて笑顔で……楽しそうな姿しか見てこなかったのに、その裏側で今までも泣いていたのかなと思うと、居ても立っても居られないよ。」

お義父さんはそう言いながら優しく私の頭を撫でた。

優しいお義父さんの事だ。本当に心配してくれているのかもしれない。

昨日……初めて泣いた顔を見られたから。

尊敬するお義父さんの下心なんて知りたくない、見たくもない、気付きたくもない……日常に不満を抱えていたくせに、日常にいまだに縋ろうとする自分が滑稽だった。

…お義父さんの優しさを…信じたかった。
だから私は…

「四年以上…です…」

と小さく答えを漏らした。

「だめ…お義父さん、やだ、それだけはだめ…！」

慌ててお義父さんの手首を掴んだけど…もう遅かった。

お義父さんの長く太い指は、もう私のクリトリスを捉えてしまっていた。

「ああ…っ、や、ま…って…」

「待たないよ。」

愛ちゃん、君はもう四年以上も待ったんだろ？」

「もういいだろう？」

もう待たなくていい。そろそろ解放してあげよう。不満から。」

お義父さんはそう言うのと、クリトリスをさする指の速度を上げた。

「んああ…あ…や…ああっ…」

四年以上も待った…そんなお義父さんの言葉に何も反論できなかった。
だってその通りだったから。ただ愛して欲しかった。

セックスなんてなくても…幸人はそう言うけど…

彼の言う事は間違っていないのかもしれないけど、それでも愛されたかった…。

こんな風に気持ち良くしてほしかった。願わくば夫に…。

【激甘NTR】義父の救済SEX2

隣で眠る夫の横で義父の愛撫に悶える夜。指輪を外し、身も心も義父へ自ら堕ちてゆく（サンプル（一部抜粋））

夫を送り出した後、お義父さんは私をソファに座らせた。

「ほら、下着を外しなさい。

どんな状態になっているかも見せて。」

「ひあっ、ああ…気持ちいい…お義父さん…」

機械の冷たい振動。

けれどお義父さんの視線が混じると、途端に熱くなる。

「イきたい…」

「いいよ。イきなさい。」

絶頂を迎えても、心はどこか寒かった。

お義父さんの「熱さ」が欲しくてたまらなかった。

「…ねえ、幸人。」

「ん？」

「私の事、好き…？」

私の質問に幸人は少し目をそらして数秒沈黙し…

「家族として好きだよ。」

と答えた。

「家族と…して？」

「うん、だって家族じゃん？」

女とか男とか、そういうのを超えた存在というかさ。

なんか…空気？

いる時は必要だなんて意識はしないけど、いなくなったら生活出来ないの？

んー、うまく言えないけど、大事な家族だよ。」

一見優しい言葉…なのかもしれない。

でも私には牽制に聞こえた。

家族なんだから、これ以上を求めて来るなよって言われているような気がした。

数分後、カチャッと小さな音を立てて夫婦の寝室の扉が開いた。

お義父さんは人差し指を唇にあて、しーっとジェスチャーをしていた。

私は静かに頷きながら身体を起こした。

お義父さんはゆっくりと私に近付き、ぎゅっと強く抱きしめてくれた。

幸人の軽いハグとは違う。

逃げ場をすべて塞がれるような、重圧で壊されてしまいそうなほどのハグ。

私は浅く呼吸をしながら、お義父さんをぎゅっと抱きしめ返した。

「…おしおきだよ。」

お義父さんは私の耳元で小さな声でそう呟いた。

「え？」

「…一体ただけお預けをくらったと思ってる？」

「ただけ…こうして触れたかったか。」

お義父さんは小さくそう言う私の耳をそっと指で撫でながら、甘く深いキスをしてきた。

お義父さんは布団の中で熱い吐息を漏らしながら、ゆっくりと私の膣に指を入れた。

くちゅっとした音が鳴る…

的確に私の気持ちのいい場所を押し上げるお義父さんは……私の身体を私よりも理解しているんだらうな。

お義父さんに知りつくされた身体を、もっとおかしくしてほしい……
夫のイビキを聞きながら頭はお義父さん一色だった。

「んん……んっ、……っ」

お義父さんの指が入った瞬間にぐちゅっとなが湿るのを感じた。

クリトリスをじゅるじゅると舐められ、中で太い指は動く……

久しぶりに与えられる暖かい愛撫に、あつという間に私は限界を迎えていた。

「んん、ん……ああ……いく、いっちゃう……」

我慢出来ずに漏らしてしまう声……

お義父さんの指が激しくなる……

でも次の瞬間、幸人の背中がびくくと動いた。

「ん？」

幸人の小さな声が響いた。

お義父さんの唇が少し私から離れた。

「なに……してんの。」

【激甘NTR】義父の救済SEX
後日談

サンプル（一部抜粋）

お義父さんの吐息が敏感な部分に当たる。それだけで身体が震えるほど、限界ギリギリだった。

「…愛ちゃん。」

「ん…は…い…」

「すぐにイこうとする愛ちゃんに、明確な罰を決めようか。」

お義父さんはクスッと楽しそうに笑いながら、いつもより意地悪に私を試すようにそう言った。

「…罰…？」

「…今日イっちゃったら…一週間お預けね。」

「え…？」

「頑張ってね。」

お義父さんは私から少し離れ、見下ろしながら甘く冷たくそう言い放った。

「ソファに手をついて立って。」

一週間もお預けなんて嫌だ…お義父さんの愛がないと、枯れてしまう…

そう思うのに、短い命令には逆らえなかった。

ギシッと音を立てて立ち上がり、言われた通りお尻を突き出すように立った。

「…いい子だね。」

お義父さんは私の後ろに立ち、そつと指で背中を撫でた。

お義父さんの両手が私の腰をがっしりと掴む。今からどうされるかなんて、考えなくても分かる。

お義父さんは私の中に、反り立ったソレをゆっくりと侵入させた。

「んあぁっつぁ、あ…あ…」

いつもより更に硬いお義父さんのモノが、私の中をじんわりと進む感覚に声が抑えられなかった。

「…イっちゃダメだよ？分かった？」

お義父さんの声が聞こえる。私は必死で頷いてイかないように唇を嚙んだ。ただど次の瞬間、ズンと奥に重く鈍い衝撃が駆け抜けた。

「…気持ちいいの？」

「きもちいっつ、あ…動いちゃダメ…っ、お願い、だめえっつ」

「それは聞いてあげられないお願いだな。」

（全容は製品版にて）